

ブラームス 《3つの間奏曲》Op. 117 研究
— 歌曲の性格を有する3曲の〈インテルメッツォ〉 —

中村亮介（同志社大学）

ブラームス（Johannes Brahms, 1833~1897）は、4曲の交響曲をはじめ、数多くの器楽曲を作曲しており、これらの楽曲は一般的に、純粋に形式的な追究を目指す音楽、すなわち絶対音楽としてとらえられている。この傾向は、1892年から翌年にかけて作曲した一連の後期ピアノ小品集においても、基本的には認められる。これらのピアノ小品集のうち、Op. 117は《3つの間奏曲》と名づけられているが、後続する作品集のタイトルが、《6つの小品》Op. 118、《4つの小品》Op. 119であることを考えると、そのタイトルは、《3つの小品》でもありえたであろう。ブラームスがこの小品集を《3つの間奏曲》と名づけた理由としては、単に3曲とも〈インテルメッツォ〉であるからということが考えられるが、もう一つの理由としては、そのようにタイトル化することにより、この3曲の〈インテルメッツォ〉に、特別に焦点を当てていたことが考えられる。発表者は、二つ目の理由に着目しており、これら3つの〈インテルメッツォ〉には、何か特別の意味が込められているのではないかと考える。本発表では、その意味が何なのか探りたい。

Op. 117の3曲の〈インテルメッツォ〉は、いずれも三部形式で書かれており、さらに、第1曲にはオスティナートやヘミオラのリズムといった技法、第2曲には下行3度の音型、そして第3曲には1フレーズが5小節単位であるという技法が見られる。これらはブラームスが慣れ親しんできた作曲技法であり、そのことと、小品集群を作曲する直前にブラームス自身が遺書を書き、これまでに作曲した作品の整理を行っていたという伝記的な事実をあわせて考えると、人生の総決算としてこの小品群を作曲したものであると捉えられる。しかしながら、Op. 117の3曲にのみ靈感となる詩が示されていることが先行研究では指摘されている（Max Kalbeck, *Johannes Brahms IV*, Berlin, 1915）。作曲者が自身の手紙の中で、この3曲に対して、「わが苦悩の子守歌」と発言していること、スコットランドの詩との関連があること、彼が過去に作曲した歌曲との音型の類似についてはすでに言及されてきたが、実際の音楽としてどう響くかについての言及は、管見の限りなかった。今回、発表者は第1曲の〈インテルメッツォ〉に関して、楽曲の主旋律に詩をあてはめて歌うことが可能かどうかについて実験を行い、結果としてそのように演奏することが可能であることが判明した。その他の2曲についても、第1曲とは違った形ではあるが、詩との関連が認められた。したがって、この3曲の〈間奏曲〉は歌曲に通じる性質を持つ楽曲であると考察される。こうした歌曲との結びつきは、絶対音楽の作曲家であるとみなされがちなブラームスにおいても、標題音楽的な意図があることを示しており、これがOp. 117の3曲の〈インテルメッツォ〉の特別の意味であると結論付ける。